

私たちは沖縄・オキナワをどう学ぶのか —沖縄での平和学習の経験から—

0.はじめに

琉球大学教育学部で社会科教育・平和教育などを研究しています山口剛史（やまぐちたけし）と申します。短い時間ですがよろしく願いいたします。ただ、沖縄の歴史・沖縄戦、基地について紹介してもつまらないかと思しますので、私が沖縄の子どもたちとどのように学んできたかを紹介しながら、沖縄戦や米軍基地について一緒に考えたいと思います。その中から、沖縄もしくはオキナワを学ぶとはどういうことか一緒に考えたいと思います。

1.沖縄の新聞投書に書かれた子どもの感想

9月30日、6年生のみんなで糸数アブチラガマの見学に行きました。私は糸数アブチラガマの見学を通して改めて大切だと思ったことが二つあります。

一つ目は家族や家の大切さです。私はいつもあたり前のように家に帰り家族と話をします。しかし、沖縄戦の時は、家はなく家族と会えずに暗い場所でうめき声の中で生活するしかありません。糸数アブチラガマはごつごつして家とはまったく違いました。

二つ目は、食糧の大切さです。糸数アブチラガマにいた人は、天井からぼつぽつと落ちてくる水を飲んだそうです。いまではほかほかなごはんや冷たくておいしい麦茶やジュースを飲みたいとき、食べたいときにたくさん飲んだり食べたりできます。

こんな平和な時に生んでくれた両親や支えてくれた周りの人に感謝したいです。

「うあ。ほんとうに真っ暗だ…」

9月30日、私たち高嶺小学校6年生は、南城市にあるアブチラガマに見学に行きました。

ガマに入りいろいろな場所に行っている時、ガイドさんが「ここは、もう助からない兵隊さんたちを寝かしていた所です。4秒間だけ、懐中電灯の明かりを消してみましよう」と言いました。

明かりを消してみると、さっきまで明るかった場所が一気に真っ暗になりました。どこを見渡しても真っ暗でした。例えるなら目を閉じて回りを見ている感じでした。こんなに暗い中爆弾などから身を隠しているのはすごいと思いました。

わたしは、アブチラガマに行ってみて、体験してみて、ガマの中の怖さや、寒さなどまでとてもわかりました。

わたしは戦争の怖さを知るよい体験ができてよかったです。

私は、学校の道徳の時間に、戦争について勉強しました。

先生が「きくさんの沖縄戦」を見て書いた紙しばいを見終わって思ったことがあります。

一つ目は、けが人の薬がなくなったら、のこぎりで切るとき、いたそうに見えないのかな、こわくないのかなと思いました。私だったら、こわくて、にげると思いました。

二つ目は、けがをしたへいたいさんたちに、ご飯や、トイレなどの世話を毎日ってつかれないのかなあと思いました。

三つ目は、なぜお手伝いをしたいと思ったのかなと思いました。私は、家族といると思います。また、きくさんはコロナウイルスより倍のこわさを知っていて、すごいと思います。戦争でいきのこった人は、すごいです。おそろしい戦争をなくしたいです。

子どもたちと平和学習を通じて考えたいこととは何でしょうか？

沖縄を学ぶとは、どのようなことがわかる・気づくことが大事なのでしょう？

2.やってみよう！沖縄戦・米軍基地クイズ

(1) 日本が一番長い間戦争をしたのは、どこの国？

(①アメリカ軍 ②イギリス軍 ③中国軍 ④その他)

(2) 沖縄戦の時、1945年3月26日アメリカ軍が上陸した島は？

(①沖縄島 ②座間味島 ③石垣島 ④その他)

(3) 女子学徒隊の中で有名な「ひめゆり学徒隊」で一番若かったのは何歳？

(①12歳 ②15歳 ③18歳 ④その他)

(4) 6月23日は「慰霊の日」です。この日は何があった日？

(①沖縄戦が終わった日 ②日本軍の司令官が死んだ日
③日本の戦争が終わった日 ④その他)

(5) 沖縄戦の時、沖縄の人々はどのようにして亡くなったのでしょうか？その理由を思いつくだけあげてみましょう。

(6) 沖縄の米軍の中で、一番人数が多いは？

(①陸軍 ②空軍 ③海軍 ④海兵隊)

(7) 沖縄の米軍基地の主な使用目的で、一番多いのは？

(①飛行場 ②倉庫 ③兵舎 ④訓練場)

(8) 宜野湾市にある普天間基地（飛行場）を建設したのは？

(①日本軍 ②アメリカ軍 ③沖縄県 ④日本政府)

(9) 普天間第二小学校で実際に行われている訓練は？

(①米兵が教室に侵入した時のための訓練 ②米軍機が学校に墜落した時のための訓練
③教室に実弾が飛んできた時のための訓練 ④米軍が小学校を使用するときのための訓練)

(10) 沖縄の人たちが米軍の訓練・基地建設に反対するため、実際に行っていないのは？

(①座り込んで、米軍を基地に入れないようにしたり、工事ができないようにする
②県民大会を開いて日本政府に基地建設反対の意思をしめす
③アメリカ大統領に手紙を書いて基地の撤去を訴える
④米軍と戦い、実力で米軍を追い出す)

では、答え合わせをしながら、沖縄戦、米軍基地について確認していきましょう。

3.沖縄で生きるとは（基地問題は平和的生存権の問題）



ぼくも 私も

窓落下もう起こさないで

島 尚孝=小6

ぼくは2学期をふり返ってみました。いろいろなことがありました。運動会や、学習発表会、音楽発表会などがありました。その時は、とても楽しかったです。

だけど、大変な事故が起きました。12月13日、ぼくたちの普天間第二小学校の運動場にCH53ヘリの窓が落下しました。その時は、学校全体がパニックになり、警察官やスーツ姿の人たちがいっぱい来ていました。以後、学校では、運動場が使えなくなりました。そして、アメリカ軍の人が学校に来て、「グ

ラウンドの上は最大限飛びません」といってくれました。ぼくは、二度と、このような事故が起こらないようにしてほしいです。

(宜野湾市、普天間第二小)

ぼくも 私も

ビックリしたヘリ窓落下

宮平 紗蓮=小6

私のかよっている普天間第二小学校で、12月13日、授業中、運動場の中心に、CH53というヘリの窓が落下してきました。その時、私は教室で授業をしていて、いきなり放送がながれ、ビックリしました。

けがをした児童1人は、さいわい軽傷ですみ、大けがの人が一人もいなかったの、とって

も良かったです。

もしも、あと少し時間がずれていたら、自分は死んでいたかもしれない、そう思うと、コワイと思いました。物などはこわれてしまっても、なおしたり、つくりなおすことができますが、人間は死んでしまったら、なおしたり、つくったりできません。

いつ戦争がおこるか分からない。今おきてしまってもおかしくない。戦争は人の命をうばってしまう。私は戦争をおこさないよう、平和を少しずつ増やしていくことを、3学期のめくひようにしました。

みなさんも、新年の目標を決めて、それをたっせいしてみてください。

(宜野湾市、普天間第二小)

【学校の先生 普天間第二小学校の6年担任であった多和田一美先生】

私たち学校(がっこう)職員(しょくいん)には何ができるのだろうか。皆(みな)で悩(なや)み考えた。何よりも大切な子どもたちの命を守るためどうすればよいのか。それから毎日のように会議や保護者会(ほごしゃかい)。学(が)期末(きまつ)の時期と重なり心身(しんしん)共に疲弊(ひへい)していった。

そんな時、励(はげ)まされたのは保護者や地域、県外の方々からの手紙・電話などだった。「元気を出してください」「何もできませんが応援(おうえん)してします」。一つ一つがありがたく心に響(ひび)く言葉だった。

私たちも前を向き、できることをやっといこうということになり、学校全体で元気になる企画(きかく)を進めていった。「元気朝会」。体育館で子どもも大人も思い切って踊って動いて、最後に呼吸(こきゅう)を整(ととの)える。久しぶりに学校みんなで楽しむことができた。運動場に出られない中、子どもたちも自分たちで工夫して休み時間を過ごしている。

あれから一カ月。今日も学校周辺を飛ぶヘリの音。児童も園児も先生も、足を運ばない運動場。まだ戻らない普天間第二小学校の日常。監視(かんし)カメラや監視員(かんしいん)の対応(たいおう)で運動場使用再開が予定されている。しかし、それで全て解決(かいけつ)されるのだろうか。私たちは運動場に出る気持ちになれるのだろうか。一人一人気持ちは違うと思うが私は自信がない。

今、私たちは毎日、迷(まよ)いの中で教育活動を行っている。避難(ひなん)マニュアルはこれでよいのか。命を守るために子どもたちとどんな学習をすればよいのか。私たちのすべきことは何なのか。

(2018年1月13日 沖縄タイムスに掲載された手記より一部抜粋)

2018年12月13日 沖縄タイムス

避難指示事故後678回

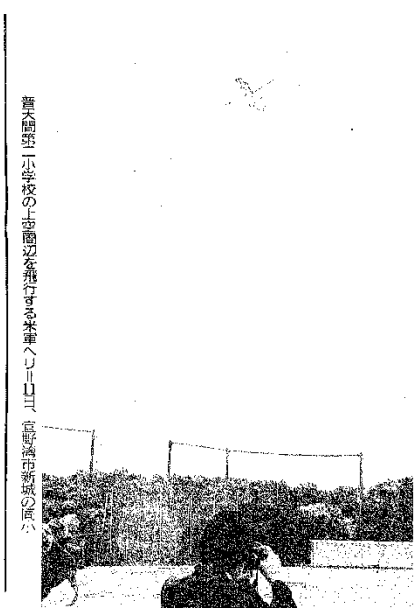
普天間第二小学校の窓落下ヘリの窓落下 大きな発生1年

【宮野湾】宮野湾市新城の普天間第二小学校(桃原修校長)の運動場に、米軍普天間飛行場所属のCH53E大型輸送ヘリが重さ7・7トンの窓を落下させる事故から13日で1年となった。事故後、米軍機接近の際に沖縄防衛局の監視員の指示で児童が避難した回数は合計678回。避難時は授業や遊びが中断された。9月12日からは教諭・児童の判断、監視員の配置を解除した10月以降は児童個人の判断で「避難行動」をとった。

のは計15回で、米軍機の警戒を続けている。
(3・26面に関連)
同小PTAの要望として、沖縄防衛局、市教育委員会との協議で設置が決まった避難施設が、8月末までに2カ所完成。その他、米軍機の飛行実態をチェックする監視カメラ、学校位置表示灯、内線電話、監視員の配置など、対策として0万円になったことが分かった。年度内にプールそばの避難施設なども完成予定。隣接する幼稚園の避難施設設置も協議を進めている。

事故後、日米両政府は市内の学校上空の飛行を「最大限可能な限り避ける」と合意したが、2月23日には外来機が同小の上空を飛行。米軍は認めていないが、防衛局の見解では1月18日にも米軍ヘリが上空を飛行している。その後、上空飛行はないとするが、上空周辺を飛び交う危険な現状は今も変わらない。桃原校長は、基地近辺で生活する以上、学校外でも危険は同じだと言、「個人で危険を回避する力を育てていきたい」と話した。

松川正則市長は、11月から外来機が飛来していることに触れ「危険性は日々感じている。負担軽減を実感するには程遠い」と語った。同小は13日、事故を考慮する集会を開き、桃原校長がなぜ学校が基地に隣接しているかの設立経緯を説明するほか、児童が事故について学ぶ「PTAアンブレラ」を開く。



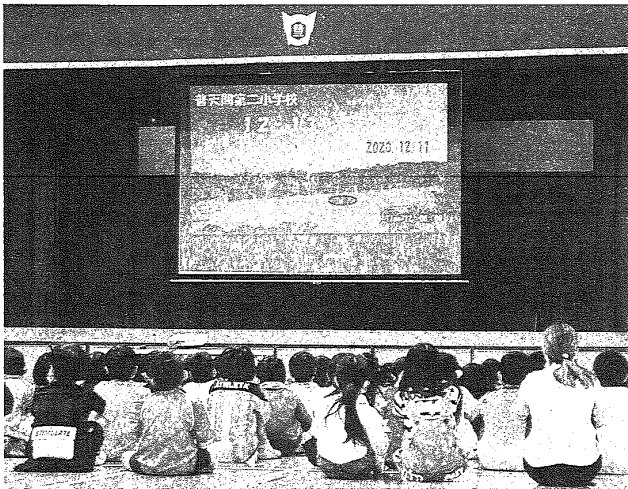
普天間第二小学校の上空を飛行する米軍ヘリ11日、宮野湾市新城の同小

「教育受ける権利侵害」

米軍機窓落下3年 普天間第二小で集い

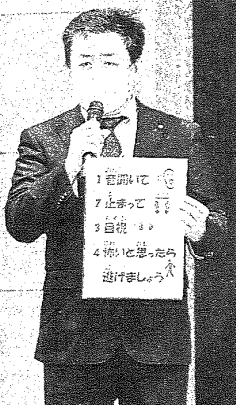
【宜野湾】米軍普天間飛行場に隣接する宜野湾市新城の市立普天間第二小学校(知念克治校長、623人)で2017年12月13日に発生した米軍ヘリ窓落下事故から3年を迎えるのを前に、同小で11日、事故を忘れず平和や命について考える集いがあった。事故後、米軍機が飛ぶたびに避難する児童の様子や日常的に騒音に悩まされる現状の動画を流した。動画では「子どもたちの教育を受ける権利が恒常的に侵害されている」と指摘した。

(2面に関連)



米軍機の窓落下から3年を前に、普天間第二小学校で開かれる「12・13を考える日」=11日午前8時42分、宜野湾市新城の同小

事故映像見るたび涙



児童らに危機回避能力を高めることを呼び掛ける知念克治校長

【宜野湾】普天間第二小学校の知念克治校長(58)は、嘉手納村(当時)で生まれ、52年前に嘉手納基地でB52戦略爆撃機が墜落した事故に遭遇した。基地の危険性や騒音を長年、肌で感じている。

1968年11月19日未明、嘉手納基地でB52が離陸に失敗し墜落、搭載した爆弾が爆発した。基地のフェンス近くに住んでいた知

知念克治校長

集いは新型コロナウイルス感染症防止の観点から、体育館で2学年ごとを開いた。窓が落下する映像を見た1、2年生は、知念校長を思いやっていた。

から「怖かったと思う人」と問われ、ほぼ全員が手を上げた。教室で集いの感想を書いている最中もヘリが飛び、耳をふさぐ児童もいた。

知念校長は、児童の危機回避能力を高めるため①音聞いて②止まって③目視④怖いと思ったら逃げましょう」と呼び掛けた。1、2年生の集い終了後、知念校長は同校の状況について報道陣に「普通ではないことを知ってほしい」と話した。校長室の前には「安心して学校生活が送れますように」と書かれた職員メッセージも掲げられた。

基地の危険性 肌身に

念さんは屋良小1年生。事故直後は覚えていないが、学校に行くとき新築の幼稚園の窓ガラスが全て割れていたことを記憶している。

父が「ここにいたら命がいくつあっても足りない」と翌年、家族10人で具志川市(当時)に引っ越した。2年後の71年、知花弾薬庫から毒ガスが移送され自宅周辺を通り、台所から「毒」の赤い文字を見た。父は「沖繩はどこに住んでも一緒」と話していた。

今年4月に普天間第二小に赴任した知念さん。開校から51年間、歴代校長が隣接する普天間飛行場に負わされてきた苦悩を改めて感じている。事故映像を見るたび「涙が出てくる」と言う。児童の教育環境を守る立場として「一番は基地がなくなるのだが、一校長の力だけではできない」と苦しい胸の内を吐露した。

(2020年12月12日 琉球新報)

山口の実践で出てきた子どもたちの声

- ・これまで、たくさんの事故があり、最近小学校に窓が落ちてきたときの、私たちと同級生の意見や先生側の意見を聞くことができ、ちゃんと私たちも基地について関わっていきたいな。と思いました。また、解決策として大学生の意見もわかり、すごく政治に関わることが大切ということがわかることができて、すごく楽しかったです。
- ・ぼくは、今日の授業を受けて新聞などを見て米軍の怖さを改めて知ったけど、米軍もやろうとは思ってはいないと思うけど、解決策を詳しく考えたのでこれは取り入れないと思うけど、良い授業だったので、もっと詳しく考えたりできたらいいなと思いました。
- ・ぼくは、今日の授業を受けて、沖縄の米軍基地問題を解決するのはとても難しいと思いました。だけど、少しでも問題解決につながることはたくさんあると気付きました。最終的には、安全に過ごせることが大切だと思います。
- ・今日の授業では、かいけつさくを提案したけれど、基地をなくす方法も、アメリカとの仲がうすれると思うし何もないところに移設したとしても、日本は何もしないでいいのとも思うし、日本人も運営などをしてても事故が起こってしまう確率も十分あると思います。私は大学の人も、みんなの意見も聞きましたが、アメリカ軍も日本政府も沖縄市民もなっとくするような意見とはどのようなものなのか疑問に思いました。みんながなっとくするような方法は本当にあるのかなと思いました。

子どもたちの疑問

①なぜ日本や沖縄にあるのか

- ・なぜ日本にあるのか？アメリカにおいていた方がいいんじゃないのか？なぜ日本はお金をはらってまできちをおいているのか？
- ・国のじじょう、基地のある意味、困ること
- ・基地はなぜ沖縄にあるのか。
- ・日本政府はなぜ事故が起こっているのに基地を置くのか？基地を沖縄からなくすとどういうことがおこるのか？基地はなぜできたのか？日本政府はなぜ市民の税金を使ってまで基地を置くのか？これから沖縄はどう動くのか？今日の授業で、基地があると人の命がうばってしまうとゆう恐ろしさがわかりました。

②アメリカ軍の対応について

- ・米軍が約束を守らないことや、どうしたら事故が減るのかということをもっと疑問に思いました。他の県に基地を移設しても良いのかなということももっとしりたいとおもいました。
- ・基地がどうなるか知りたい。アメリカ軍がどう思っているのかも知りたい。
- ・アメリカ軍としては、本当に悪いと思っているのか、それとも自分の国じゃないから別にいいと思っているのか知りたいなと思いました。

③日本の対応について

- ・日本はなぜ沖縄県のひとのいけんも聞いているのにアメリカ軍の基地を残そうとするのか。なぜ日本は沖縄県だけに基地を残そうとしているのか。

④基地の成り立ちについて

- ・基地ができたいきさつ

4.現在求められる平和教育とは—考える平和教育の重要性—

高校・大学生と対話の中からでてきた平和教育に関する不満

「平和教育というと、『戦争はだめ、平和は大事』という感想を書けばいいと思っていた。」
「沖縄戦について、勉強してきたと思っていたけど、大学で学んで、わからないことがたくさんあった。わかった気になっているだけだった。本土からきた学生の方が自分たちよりもよく考えていると思った。」

→ 「平和教育のマンネリ」と表現されることがある。その内容とは…

(1) 子どもの思考が生まれにくい授業

- ①「戦争はだめ、平和が大事」が答えであると子どもたちが思い込んでいること
- ②凄惨な画像や映像がもたらす生理的嫌悪感が学習において思考停止をもたらしていること
- ③教師のおしつけ

(2) 子どもの実態・興味関心をふまえない授業

→ 学ぶ主体である子どもに疑問や思考の自由が保障されていること、つまり子ども自身の力で平和とは何か、なぜ平和が大事かを考える場が授業につくりだされているかが、通常の授業だけでなく平和教育においても重要である

沖縄戦・米軍基地の学習で大事にしてほしいこと

沖縄戦、そして沖縄の戦後史、現在が示していることの一つは、「私たちと軍事・軍隊の共存はできない」ということです。このことを子ども（学習者）自身が主体的に追求していくことが沖縄における平和教育に求められることだと考えています。

(1) 沖縄戦学習では

- ・沖縄戦学習は、「軍隊とは何か」を問うこと
- ・戦争体験者の減少の中でどのように体験を「継承」する方法の工夫が必要となっている。「ヒトとモノ」を使った学習の必要性。戦争体験者（被害者・加害者）への共感の重要性。子どもたちに「戦場」を具体的に想起させ、共感共苦を促す授業を。

(2) 基地学習では

- ・人間の安全保障を考えるための軍事主義からの脱却を構想できるように
- ・基地が生み出す人権侵害を平和的生存権の問題として考えることができるように

民主主義 本土に問う

「大弦小弦」で紹介 反響相次ぐ

田場小6年飛翼さん作文

本紙1面コラム「大弦小弦」で紹介した小学6年生の作文が反響を呼んでいる。「なぜ沖縄県では民主主義が守られないのか」と本土に問う全文をツイッターで公開した記者の投稿は、1日で8万4千回閲覧された。「すぐストレートで心に突き刺さる」などの感想が寄せられている。

うるま市立田場小6年のとめ、本紙に寄せた。「本紙に寄せた。『本紙に寄せた。』と、本土の人達に沖縄の現状を知らせてほしいです。そして、

ナーランシー飛翼さんの作文全文

僕は沖縄で生まれ育った。沖縄には僕が生まれるずっと前の75年前から続いている問題がある。僕はその問題を大きく分けて二つ、多くの人に知ってほしい。

一つ目は「新基地建設問題」である。その場所は辺野古にある大浦湾であり、そこは、様々な環境が複雑に入り組み「生き物の宝庫」と言われている。森や川にはリュウキュウイノシシや果の天然記念物イボイモリ、絶滅危惧種のジュゴンの生息地域でもある。

マンガローフ林は東村の慶佐次に次ぐ規模で、ハゼや貝、カニが多く生息している。そこは潮が引くと干潟となり、カニの群が現れる。海水からこし取られたプランクトンが、カニや貝の餌になり分解

される。だから、干潟は自然の浄化槽と言われている。このような生物多様性の重要な地点である大浦湾に基地建設をすると、無数の命が土砂の中に埋められ、死んでしまう。この現状を止めようと、基地の前に座り込み「やめて」と言う。その人達を警察が取り押さえたり、また、その人達の様子を誰かがネット上で拡散している。

僕はおかしいと思う。現地に住む人達にとって、基地ができる、公害や騒音被害、健康的で安心できる生活が脅かされる事は、他の嘉手納や普天間を見ていても明らかなのに、なぜ国は、力づくで基地建設を押し進めていくのか。

日本は、民主主義の国である。と社会科で学んだ。なぜ沖縄県では民主主義が守られないのか。県民投票で反対が多く、知事も反対と言っているのに日本政府は聞き入れてくれない。その理由はなぜだろう。大浦湾の自然は一度失うと、もう元には戻らない。なぜそこまでして、沖縄に基地を造りたいのか。他の46都道府県でも、政府は沖縄県と同様なことができるのだろうか。僕にはわからない。

二つ目は「人権と環境問題」です。以前、女性が、夕方ウォーキングをしていたら車で連れさらわれ、殺害されました。また、小学校の運動場に、ヘリの窓わくが落ちてきたり、保育園の屋根にもヘリの部品が落ちています。また、分解できないPFAS、PFOAなどの化学物質が基地内から出て、公園や川に流れ広まった時には、米軍の人達が処理せず、沖縄県消防署員が作業しています。なぜ、このような危険な化学物質を沖縄県での使用が認められているのか。

実際に、嘉手納基地周辺の民家地下水から、指針値の60倍に当たる三ナフタ（1ナフタ）たり、普天間飛行場周辺では、二ナフタと、いずれも環境省の定める暫定指針値、50ナフタを軽々と超えています。なぜ、環境省は米軍に使用を停止するよう働きかけないのか。なぜ沖縄で日常的に起きているこのような大事件を、本土のテレビや新聞は、大きく取り上げてくれないのだろうか。国連が二〇三〇年までに達成を目指している、SDGsの6番、安全な水と10番、国家間の不平等を是正するを、政府は、真剣に沖縄県民の命を守ってくれるのだろうか。

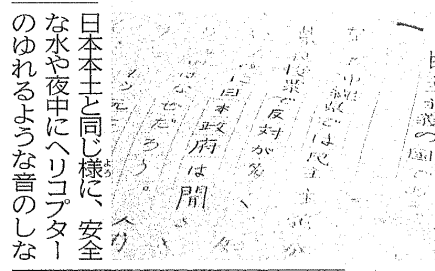
静かな夜を過ごしたいです」と書いた。22日、1面コラムと筆者阿部岳記者のツイッターで紹介された。ツイッターに寄せられた感想を見た飛翼さんは「同じように思ってくれる大人がたくさんいると分かってくれしかなかった。もしかしたら、沖縄の現状を変えられ

るのに日本政府は聞き入れてくれない。その理由はなぜだろう。大浦湾の自然は一度失うと、もう元には戻らない。なぜそこまでして、沖縄に基地を造りたいのか。他の46都道府県でも、政府は沖縄県と同様なことができるのだろうか。僕にはわからない。

二つ目は「人権と環境問題」です。以前、女性が、夕方ウォーキングをしていたら車で連れさらわれ、殺害されました。また、小学校の運動場に、ヘリの窓わくが落ちてきたり、保育園の屋根にもヘリの部品が落ちています。また、分解できないPFAS、PFOAなどの化学物質が基地内から出て、公園や川に流れ広まった時には、米軍の人達が処理せず、沖縄県消防署員が作業しています。なぜ、このような危険な化学物質を沖縄県での使用が認められているのか。

実際に、嘉手納基地周辺の民家地下水から、指針値の60倍に当たる三ナフタ（1ナフタ）たり、普天間飛行場周辺では、二ナフタと、いずれも環境省の定める暫定指針値、50ナフタを軽々と超えています。なぜ、環境省は米軍に使用を停止するよう働きかけないのか。なぜ沖縄で日常的に起きているこのような大事件を、本土のテレビや新聞は、大きく取り上げてくれないのだろうか。国連が二〇三〇年までに達成を目指している、SDGsの6番、安全な水と10番、国家間の不平等を是正するを、政府は、真剣に沖縄県民の命を守ってくれるのだろうか。

ぼくは、本土の人達に沖縄の現状を知ってほしいです。そして、日本本土と同じ様に、安全な水や夜中にヘリコプターのゆれるような音のしない、静かな夜を過ごしたいです。



ナーランシー飛翼さんが本紙に寄せた作文

い、静かな夜を過ごしたいです」と書いた。22日、1面コラムと筆者阿部岳記者のツイッターで紹介された。ツイッターに寄せられた感想を見た飛翼さんは「同じように思ってくれる大人がたくさんいると分かってくれしかなかった。もしかしたら、沖縄の現状を変えられ

るんじゃないかと思いましたが」と話した。今後、本土や米国の新聞にも投稿したいという。

本土からの感想には「沖縄の小6は日々理不尽と不条理を抱えながら生きていくなだと思つと辛くなりま

す」「沖縄の人々の声を真摯に聞き、討議するよう行動するよう心がけます」「全文を全ての大人が読むべき」などがあつた。

誤字を直したほかは原文のまま